

●岐阜経済大学地域経済研究所公開講演会

福島原発事故と食卓の放射能汚染

講師 安齋育郎*

1. 福島原発事故を防ぎ切れなかったこと、申し訳なく思います
 - (1) 第2次世界大戦と「広島・長崎」原爆投下による放射線被害
 - (2) 戦後世界における米ソの主導権争いとピキニ環礁での福竜丸の被曝
 - (3) 原発の実用化と日本への導入
 - (4) 安齋育郎と原子力
 - (5) 原発を強力に推進させた二つの仕掛け
2. 基本認識：放射線は被曝しないにこしたことはない
 - (1) 放射線の影響
 - (2) なぜ子どもは大人よりも放射線から守られるべきなのか？
3. 放射線防護の基本
 - (1) 「浴びない」「取り込まない」が大原則
 - (2) その上で、放射線から身を守るには？
4. 外部被曝から身を守るには？
5. 内部被曝から身を守るには？
6. どれぐらい被曝する？
7. 何よりも実効的な対策の重要性
——「過度に恐れず、事態を軽視せず、理性的に怖がる」

皆さんこんにちは。

お手元に今日の話の筋書きを書いたレジメが用意されていますけれども、最初にそこに書いてないことを少しまとめてお話しした上で今日の主題に入りたいと思います。最初の前振りが長めになるかもしれませんが、なぜこういう事態に至ったのかということ、歴史的な経過を含めて少しお話ししたいと思います。

1. 福島原発事故を防ぎ切れなかったこと、申し訳なく思います

私は、生まれはそこにありますとおりで、1940年というのは昭和15年で、年配の人なら皇紀2600年と言うとわかったりするのですが、71歳です。9人兄弟の末っ子で、東京の下町の、昭和20年

3月10日の東京大空襲で全滅した地域で生まれ育ったので、そこにいたら一家全滅していたのですけれども、その数ヵ月前に福島県に疎開しました。だからいま福島で起こっていることは人ごとではなくて、我がふるさとで起こっていることであります。

戦後、東京に戻ってきて、東京大学工学部の原子力工学科ができたときの最初の学生です。学生が15人で先生が40人というちょっとサボりにくい学科でしたけれども、その第1期生なので、いわばこの国がまだ原発を始める前に、原発政策を支えるための高級技術者を養成する機関としてつくられた科の最初の学生であるわけです。

学部時代の私のテーマは、この国にまだ原発が一つもなかったにもかかわらず「原子炉施設の災害防止に関する研究」というのが卒業論文のテーマで、それはその後『日本公衆衛生雑誌』というのに2度に分けて掲載されました。

原子力の本道に行くためには、本当だったら原子炉工学とか核燃料工学とかいうまさに原子炉技術を支えている中核部分に関心を持つのが普通で、そういう人も多かったのだけれども、安齋育郎は最初から放射能の安全、要するに原子力が物になるかどうかは、放射能を人間が安全に管理できるかどうかにかかっているというふう感じて、放射線防護学というのを専門に選ぶことになったのであります。

今福島でとんでもない事態が起こっていて、人類史上複数の原子炉が同時進行的に深刻な事態を経験するということは、これまでなかったことなのです。1979年3月28日のスリーマイル原発事故がアメリカであったのも、1基の原発が異常を起こしたのです。その7年後の1986年

* 安齋科学・平和事務所所長、立命館大学名誉教授、立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長

4月26日に起こったチェルノブイリ原発も、大爆発だったけれども、1基の原発が事故を起こしたのですが、今度は1、2、3、4と相次いで異常事態になっていて、しかも昨日今日の発表でもおわかりのとおり、1号機では燃料が溶け落ちて、もうほとんど原子炉の中にも燃料がなくなって、原子炉の底を溶かして、下の格納容器というところに大部分がいつているらしい。それがその格納容器の底の部分のコンクリートも65センチぐらい溶かしながら、さらに下に向かっていてのではないかというようなことがいわれているのですが、とにかくよく分からない。

原子力災害の最大の特徴は、現場を見にいけないということなのですね。見にいくと放射能で殺されるものですから、見にいけない。見にいけないから、対策をとるにも状況がどうなっているか分からないままで対策を講じるので、対処療法的なことになりかねない。なかなか厄介であります。

福島原発で、これからどろどろに溶け落ちた核燃料をとにかく取り出したい。取り出す技術もまだないので、今後開発して取り出して、放射能まみれの原子炉施設を、最後は多分チェルノブイリと同じようにコンクリート詰めの状態にするのですが、それにはおそらく50年かかります。政府は30年以上と言っているけれども、当事者は大体少なめに言うものなのですね。30年以上というのは30年以上無限にあるわけですが、安齋育郎の見立てだと、少なくとも50年はかかるだろうと思っています。被害額も数十兆円の規模になるだろうと思いますけれども、そういう大それた事態が起こっていて、一冬を越せば何とかなるとかいう事態ではないということを、われわれはしっかりと認識しなければいけないことも確かです。

(1) 第2次世界大戦と「広島・長崎」原爆投下による放射線被害

日本人が初めて放射能の災害を経験したのは「広島・長崎」の原爆です。1945年(昭和20年)8月6日朝8時15分、広島に原爆が投下された。8時15分というのは朝なぎの時間で、9,000メー

トル上空から落とす原爆が風に流されない時間帯でもあり、人々が最もたくさん屋外に出ている時間帯で、最も効率的に人を殺せる時間帯でもあったのです。その3日後、8月9日に長崎に朝11時02分に原爆が投下されたわけです。

そのときに核の地獄を日本人は体験したのだけれども、なぜそうなったのかちょっとふり返ると、1939年(昭和14年)9月1日にドイツがポーランドに侵入して第2次世界大戦が起こった。最初はヨーロッパ戦争として起こったわけです。その翌年の1940年(昭和15年)に重要な事件が起こりました。安齋育郎が生まれたわけです。それはさておき、その翌年の1941年(昭和16年)12月8日、マレー半島上陸作戦の1時間後に日本軍が真珠湾攻撃によってアメリカやイギリスとも戦争状態に入って、いわゆる太平洋戦争、当時は大東亜戦争といいましたが、ヨーロッパで始まった大戦がまさに世界大戦として5,000万人の犠牲を出すことになったのです。

ヨーロッパで戦争が始まった1939年から2年後の41年に始まった大東亜戦争(太平洋戦争)も、日本は最初だけ景気がよかったです。真珠湾攻撃でアメリカ太平洋艦隊を撃滅したというので喜んでいたのですが、もう次の年からよくなるわけです。戦局が転換して行って、昭和17年4月18日に日本はまず空襲を受ける。ドーリットル空襲といって、アメリカのホーネットという航空母艦から飛び立ったB25が東京と名古屋と四日市と神戸を爆撃したのが、日本の歴史上初めて外国の飛行機が天から爆弾を落とした空襲の最初の体験だったのです。

その年、やがてミッドウェー海戦というのが起こって、日本は勝利したというふうに国民には伝えられたけれども、6隻持っていた航空母艦のうちの4隻を失うなど大打撃を被って、それを転機としてだんだん日本は負けいくさに転じていくわけです。

翌1943年(昭和18年)になると、いよいよもって戦力が足りないというので学生を動員するようになって、学徒出陣というので10万人余りの学生が戦場に駆り立てられた。僕が勤めていた立命館大学も3,000人余りの学生を戦場に派遣

して、約1,000人が命を落としているのです。

ついでに言うておくと、同じ状況は京都帝国大学にも起こりましたが、京都帝国大学の学生が戦場で死んだのは派遣された学生の約5%にすぎないのですが、立命館は33%を誇っているというわけです。それはより危険な任務に割り当てられたのではないかとということ、立命館はけっこう軍国主義的な大学だったので、我先にそういう危険な任務に就いていったのではないかとということもありますけれども、とにかく多くの若い命が失われていったのです。

私は今、立命館の国際平和ミュージアムという平和博物館の名誉館長をやっているのですが、立命館が世界の大学でたった一つ総合的な平和博物館を持っているというのも、戦争の時代の大学運営に対する反省も含めてそうしているわけです。

とにかくそういうことになって、翌1944年(昭和19年)になると、10・10那覇空襲というのを聞いたことがあるかもしれませんが、10月10日に沖縄の那覇が空襲を受けたのを皮切りに、だんだんアメリカの攻撃が本土に及んでくるわけです。それまでアメリカは、サイパンとかテニアンとかを手にしていなかったときは航空母艦から発進していたけれども、やがてサイパンやテニアンを手に入れると、同時に開発されたB29というのが8,000キロの航続距離を持つというので、4トンぐらいの爆弾を積んでサイパンやテニアンを飛び立って、日本を爆撃して島に戻っていける状況ができて、日本の都市空襲はものすごいことになるわけです。昭和19年11月24日でしたかに東京武蔵野が爆撃されたのを皮切りに、東京が火の海になっていくのです。

さらに、終戦の年、1954年(昭和20年)1月にアメリカの司令官がカーティス・ルメイという人にかわったのですが、ここからもっとひどくなるのです。それまでは1万メートル上空ぐらいから爆弾を落としていたので、その下にジェット気流が吹いていて、そこを通過するとき爆弾がそれるので、あまり命中精度がよくなって戦果を上げにくかったのです。カーティス・ルメイは、2,500メートルから4,000メートルぐら

いの低空から、しかも夜やってきて、破壊するための爆弾ではなくて、火をつけるための焼夷弾を中心に攻撃をさせたわけです。

その仕上げの一つが3月10日の東京大空襲だったわけで、一晩で10万ないし12万人が死んだのです。広島原爆よりもある意味ではすごい。広島原爆は8月6日に投下されて、その年の年末、12月31日までの140日余りの間に14万人が死んだのですが、東京大空襲はほとんど一晩で10万ないし12万人の人が死んでいるわけです。

しかし、それでも戦争は終わらずに、ついに連合軍・アメリカ軍は3月下旬に慶良間諸島から上陸し、4月1日には沖縄本島に上陸して沖縄戦が始まる。その沖縄戦はすさまじく、両軍合わせて20万人余りが死ぬのですが、6月23日に牛島司令官というのが自決(自殺)をして、組織的戦闘は終わったということになっています。戦争がいつ終わったかというのは、実態としていつ終わったかということ、国家と国家の関係においていつ終わったかということとはちょっと違うのですが、6月23日に司令官が死んでしまったから一応組織的戦闘は終わって、今でも沖縄は6月23日が県民の休みの日になっているわけです。

それでも戦争は終わらずに、結局「広島・長崎」ということになるわけです。「広島・長崎」に至るまでには、実は昭和20年2月に、アメリカをはじめとする連合国はヤルタ会談というのをやったのです。日本とドイツとイタリアを中心とする枢軸国に対抗して連合国、この二つが世界を分けて争っていたわけですが、連合国は戦争をどう終わらせるかということについて、もう昭和18年のカイロ宣言のあたりから相談していたのですが、昭和20年2月には、ヤルタ会談といって、ソ連のリゾート地のヤルタに集まって相談した。そのときにアメリカとソ連の間で密約が交わされたのです。

いま主として戦っているのはドイツ・ヒットラーだが、ヒットラーはやがて敗北するであろう。しかし、ヒットラーが敗北しても日本は戦い続けるだろう。日本には関東軍などというちょっと手ごわい軍隊もあることだから、アメ

リカだけで相手にすると被害が大きいかもしれないというので、ヒトラーが敗北したら、それから3ヵ月以内、90日以内にソ連も日本に対して宣戦布告をしてほしい、戦争を終わらせるのを手伝ってほしいということで密約を交わしたのです。

案の定ヒトラーのドイツは5月8日に全面降伏して敗北したわけです。それで主たる相手は日本ということになった。ヒトラー政権が敗北したらすぐ、日本を主敵とするこの戦争をどう終わらせるかということについて、ポツダム会談というのが開かれるはずなのですが、アメリカがなかなか開かない。そうこうするうちに、7月16日、ニューメキシコ州のアラモゴードというところで、アメリカは人類最初の核実験に成功するのです。長崎に投下したのと同じ種類のプルトニウム原爆に成功した。アメリカが巨大な破壊手段を手にしたその翌日、7月17日にポツダム会談がベルリン郊外で開かれることになる。巨大な武力を背景にして戦争の終わらせ方をアメリカに有利に進めようというアメリカの魂胆だったわけです。

そのときに奇妙なことが起こったのです。ポツダム会談が始まる前に、ソ連のスターリンがアメリカ代表部のトルーマン大統領にあいさつに行くわけです。そのときに、ソ連も日本に対して8月15日までは宣戦布告する予定であるということを使う。あまりそういう重大な戦争の見通しについては手の内を見せないのが普通なのですが、そう言った。

翌日、今度はトルーマンが返礼としてソ連代表部を訪れたときに、スターリンがもっと重大なことを打ち明けてしまったのです。いま日本の天皇から、もう戦争をそろそろやめたいので、うまくやめられるようにソ連に仲介の労をとってもらいたいという打診が来ていると言うわけです。

普通そんな重大なことはそう簡単には漏らさないものですが、聞いたアメリカはびっくりしました。おととい開発したばかりの核兵器を使わないうちにソ連の手柄で戦争が終わりになるかもしれないというので、慌てたアメリカは、

原爆はできるだけ早く日本に対して使われるべきであるという判断になって、候補地選びが始まったわけです。第1位は京都です。第2位が広島、第3位が小倉、第4位が新潟だった。7月下旬までこの順位だったのですが、やがて京都はリストから外される。世情に伝わっているとすると、スティムソン陸軍長官が日本文化に通じていて、京都は古い日本文化の集積の地だから、そこを破壊するのはいけないと言ったというのがよくいわれるのですが、それはアメリカの宣伝に乗ってしまった感じの解釈です。

実際には、京都は古い天皇の都だから、日本国民の天皇崇拜ぶり、天皇のためなら命も惜しまないで闘っているあの姿から見て、その天皇の古い都である京都に原爆投下したら、軍事的には何か得るものがあるかもしれないが、日本国民の心をつかみとれなくなってソ連の側に向かせてしまうであろうという戦略的配慮から、京都は慎重に外されたのです。

それで第1位広島、第2位小倉、第3位新潟になったけれども、新潟も外される。テニアン環礁から4トンの原爆を持って新潟に行って帰ってくるのに、航続距離は8,000キロしかないのだけれども、新潟はそのぎりぎり。しかも新潟の街は小さすぎて原爆の威力をテストするには不足であるというので新潟が外されて、そのかわり長崎が加えられたのです。長崎にも実は反対があって、原爆投下予定地の1マイルほど北に行ったところに連合軍の捕虜収容所があるので、そんなところに落としたら、日本人も殺せるが、つかまっている連合軍の兵隊も同時に殺すことになるから長崎はやめたほうがいいというので、大阪とか大牟田とか尼崎とかいうのが候補に上がったことがありましたが、結局8月2日のセンターボード作戦の正式決定で、第1位広島、第2位小倉、第3位長崎と決まったのです。ソ連との対抗関係があるから、天候が許すかぎりできるだけ早く使われるべきであるというので、8月6日の朝8時15分に広島に予定どおり投下された。

これを聞いてソ連が焦ります。これだとソ連の出番のないままに、アメリカの原爆によって大戦が終結する恐れがある、アメリカのペース

で終わる恐れがあるというので、8月15日までに日本に宣戦布告するつもりだったのを、4日前倒して8月11日にした。それでもまだ遅いというので、ご承知のように、結局8月8日の夜中の11時に宣戦布告をして、1時間後の8月9日午前0時、満州地方からソ連が侵入してくるのです。日本とソ連の間には日ソ中立条約というのがあって、そういうときに敵とか味方にならないということだったのですが、これをソ連が破るかたちで満州地方から侵攻してきたのです。

それを聞いてアメリカが焦ります。それだとソ連も手柄を立てて日本を敗戦に導くことになるというので、8月9日の午前0時から2時間50分後、テニアン環礁から、第2の原爆を積んだボックスカーというB29を、第2番目の目標値である小倉に向かわせた。朝9時45分ごろ小倉上空にやってきて、原爆投下体制に入って小倉の上空を3回回るのですけれども、進入経路に失敗したこと、前の日に八幡の街を爆撃しておいたものだから、火災が起こってその煙が小倉にたなびいていて、原爆投下の目標が目で確認できないということもあって、3回回ってあきらめて、第3目標の長崎に行って11時02分、もう朝なぎの時間帯としてはぎりぎりですけれども、長崎上空の雲の切れ目から確認して投下したというわけです。

こうやって経過を見てみると、確かに原爆投下したのはアメリカのだけれども、これはアメリカとソ連がこの戦争を自分たちに有利なかたちでどう終わらせるかという、戦後世界の支配権をめぐる競争でもあったわけです。だから開発したばかりの核兵器が慌ただしく使われていった。

その結果二つの地獄が出現したのですが、厄介なことに、原爆を投下したアメリカが戦後の日本を占領したものだから、アメリカは自分たちが使った原爆でこんなに非人道的なことが起こったとは世界に言いたくないので、プレスコード、報道管制といって、原爆に関する報道を厳しく禁止したわけです。だから、世界の人々は広島、長崎でいかなる非人道的なことが起こっ

たのかというのはいまだに知らない。日本人の若い人もだんだん知らなくなっているのですが、本当に知らない。

70年代に僕がアメリカへ行ってボストンで講演したときに、被爆者の方も一緒に行っちゃべられたのです。そのときにアメリカ人が最初に思ったのは、広島では原爆を落としてみんな死んだはずなのに、生き残った被爆者が前へ来てしゃべっているというわけです。70年代、アメリカ人はいつかソ連と核戦争が起こるかもしれないと思っていたので、質問の時間になって「質問をどうぞ」と言ったときに、質問の第1番目は「どうすればあなたのように核戦争に生き残れるのですか?」というものでした。もっとすごいのは「日本人はミソスープを飲んでいたら助かったというのは本当ですか?」という質問ですが、それぐらい知らないわけです。

(2) 戦後世界における米ソの主導権争いとビキニ環礁での福竜丸の被曝

知らないままに、戦後昭和21年の7月からアメリカが再び原爆開発にいそしんで行って、7月1日にビキニ環礁というところで、戦後最初の原爆実験をやったのです。ビキニというと、3・1ビキニデーといってよく水爆と結びつくのですが、最初にアメリカがやったのは昭和21年7月1日の原爆実験でした。

そのとき変なことが起こったのです。アメリカがいかにもすごい兵器を持ったかということの世界中に知らせるために、世界中から報道関係者を呼んで隣の島に置いて、ドカンとやったわけです。日本から分捕った戦艦などを海に浮かべておいて、それがどのように撃沈されていくかという様子をまざまざと見せつけたデモンストレーションをやりました。世界から集まった報道関係者は仰天して、威力がものすごいもののことを「ビキニ」という言葉であらわす流行語ができたのです。

その年のパリの水着コレクションで、ルイ・ルワールという水着デザイナーが胸と腰だけを覆う婦人用水着というのを発表したときに、それを取材していた記者のなかにその流行語を知っ

ている人がいて、この水着を着用したときに男性を魅了する威力たるや原爆級であるというので、「ビキニスタイル」とつけたわけです。これは嘘ではなくて、『広辞苑』にもちゃんと出ていますから帰ったら調べてもらえばいいのですが、そういうことをいまの若い人たちは知りません。ビキニ環礁は昨年、世界文化遺産になったので、これから行く人もいるだろうと思います。そのときにあそこで泳いでもいいし、水着を着てもいいけれども、現地ではビキニスタイルと呼ばないで、セパレーツの水着と言ったほうがいいと思います。自分の島の名前が核実験絡みで水着の名前になっている、などというのはあまり気持ちのいい話ではないからです。

アメリカはそのとき同時に、こんな大それた兵器を開発できる国はそうないだろうと思っていました。ところが、その3年後の1949年、ソ連が原爆を持ってしまったわけです。セミパラチンスクというところで初めての原爆実験をやった。アメリカはひどく焦ったのです。これでは強い核兵器によって脅しつけて戦争を抑止するといういわゆる核抑止力が十分効かないというので、原爆の1,000倍も強力なスーパー爆弾である水爆の開発にのめり込んでいく。ソ連もほとんど同時に水爆開発に至って、1950年代早々には、両国ともほとんど原理的には水爆の開発に成功して、あとは実際に飛行機に積んで運べる水爆の開発ということになっていって、次々と実験が行われる。

ソ連は1952年にこれまたセミパラチンスクというところで最初の水爆実験をやったのですが、アメリカの実験で一番有名なのは、1954年の3月から5月にかけてビキニ環礁でやった一連の水爆実験です。そのうち最大のものが3月1日にやったブラボー爆発といわれる水爆実験で、日本の第五福竜丸というマグロはえ縄漁船が犠牲になり、久保山愛吉さんという無線長がその6ヵ月後の9月23日に亡くなっていった事件です。

そのときの水爆の威力を聞くと驚きます。15メガトンというのですが、メガというのは100万という意味なので、15メガトンは1,500万トンということですが、爆弾の目方はそんなに重くな

い。何が1,500万トンか。それが爆発したときの威力が、TNT火薬（トリニトロトルエン）というダイナマイト級の高性能爆薬に換算して1,500万トン相当という意味です。

そう聞いてもピンとこないとすれば、第2次世界大戦は、1939年9月1日の開始から1945年9月2日に日本がポツダム宣言に調印して全面降伏するまでの6年間に、60カ国以上が参戦して5,000万人が死んだ人類史上最悪の戦争ですが、この戦争で使われた砲弾とか爆弾を全部足し算すると3メガトンといわれているのです。「広島・長崎」の原爆も入れて3メガトン。ビキニの水爆は1発で15メガトンということは、第2次世界大戦5回分ということです。1発の兵器の威力が第2次世界大戦何回分とって数えるような時代が、第2次世界大戦が終わってわずか9年目にやってきたわけです。

それにびっくりしていたら、その7年後の1961年、ソ連がノヴァヤゼムリヤというところで、50メガトン、第2次世界大戦17回分というとてもつもない水爆実験をやったのです。そのときの爆発の衝撃波が地球を3回回ったというので有名ですけども、そういうことで、1950年代から60年代というのは、アメリカとソ連が核兵器という武力によって世界を支配するせめぎ合いをやっていた時期なのです。核軍備競争の真ただ中であつた時期、その時期にこそ原発が開発されたわけです。

（3）原発の実用化と日本への導入

原発を最初に実用化したのはアメリカではなくてソ連だったのですが、1954年6月、モスクワ郊外のオブニンスクというところに、5,000キロワットの実用規模の原発をつくった。アメリカはこれまたびっくりしたのです。アメリカにはそのころ原子力法という法律があつて、民間企業が原子力に参入すること自体を禁止していたぐらい、原子力に関しては民間ベースで進めるということについて後れていた。ところが、さっさとソ連が5,000キロワットの原発を作ってしまったので、ほうっておくと世界の原発市場がソ連によって支配される恐れがあるという

ので、慌ててアメリカは原子力法を改正して、民間企業も原子力分野に参入できるようにするとともに、原子力潜水艦に載せる予定だった原子炉、ウエスティングハウス社が開発したものを急ぎよ陸揚げして、4年後の1958年に SHIPPING PORT の原子力発電所で運転を始めた。それがアメリカ型の加圧水型原発なのです。

だから、アメリカの原子力発電所というのは、もともと地上に住んでいる人々に電力を供給するために、安全性を一步一步確かめながら開発するという段取りをとったのではなくて、大海原に行く原子力潜水艦に載せる予定だった原子炉を急ぎよ陸揚げしてつくったから、安全性の問題は二の次ということになるわけです。それで陸上に作ってみると心配になった。

そこで1957年3月にブルックヘブンレポートという報告書が出ています。これは原子力発電所が今度の福島のような大規模な事故を起こすとどういふ被害が出るかということ予測した報告書ですが、それによると3,000人余りが死に、4万7,000人が障害を受け、70億ドルの被害が生ずるといふことだった。70億ドルというのは、当時1ドル360円だから、2兆5,000億円ぐらいです。当時の日本の国家予算が1兆2,000億円ですから、原発が事故を起こすと日本の国家予算の2倍ぐらいの損害が生ずるといふ見立てだったわけです。

そのブルックヘブンレポートの結果を見て、アメリカ政府はこれでは民間企業は原発をやらなだろうと思った。当然ですね。やったはいいが、事故を起こしたら日本の国家予算の2倍を超えるような損害が生ずるといふのではとても面倒を見られない。

そこで、その半年後にアメリカはプライス・アンダーソン法という原子力損害賠償法をつくって、原発が事故を起こしたときにその損害額が102億ドルを超えたら、あとは全部国が面倒見るから遠慮なくやれといふ民間企業にも道を開いたのです。原子力発電という発電技術はもともと一つの民間企業だけではとうてい手に負えないようなしろもので、国家と電力資本が固く結びついてタッグマッチを組まないかぎりでき

ない。事実そういうスタートをしたのです。

日本もアメリカ型の原子炉を受け入れて、4年後の1961年に原子力損害賠償法をつくって同じ道を歩んでいったのです。日本の原発はどうやって始まったかといふと、この国が1954年3月1日のアメリカのビキニ水爆実験で揺れているまさにその時期に、この国の原発開発は始まるわけです。

3月1日はビキニ実験があった日ですが、その2日後です。中曽根康弘さん、これは大勲位か何かの勲章をもらった人で、まだご存命ですが、当時改進黨の代議士だった中曽根さんが、保守3党をまとめ上げて4月からの新年度予算の補正予算といふかたちで原子炉築造予算といふのを提案して、通ったのです。2億3,500万円という予算です。なぜ2億3,500万円かといふと、ウラン235からとったといふいい加減な話ですけれども、とにかく2億3,500万円の原子炉築造予算が通っていった。

日本の学者たちはそのころ原発に対しては非常に慎重だったのです。それで、ビキニ事件が起こる3月1日の2日前の2月27日に、日本学術会議が公聴会を開いて、日本における原子力研究のあり方はどうあるべきかといふ議論をしていて、慎重な意見が多かったのです。中曽根さんはその前の年の1953年8月に、アメリカのキッシンジャー補佐官が取り仕切ったハーバード大学での国際問題セミナーといふのに呼ばれていって、そこでアメリカの原子力戦略についてしっかり学んできて、日本もアメリカの原子力開発路線に乗って原発開発を急ぐべきだといふ情熱を抱いて帰ってきたわけです。

そうしたら、日本の科学者の国会といわれていふ学術会議が何かぐずぐず言っているといふので、そんなことなら札束で学者の頬をひっぱたくといふ有名な言葉があったのですが、3月3日に原子炉築造予算をつくって、そこから始まった。もちろんアメリカが濃縮ウランなどを日本に提供するかたちで、アメリカ型の原子力発電施設を日本に導入する道が開かれていったのです。

そのことを国民に広く受け入れさせるために、

正力松太郎という読売新聞社の社主が原子力平和利用博覧会というのを全国で展開して、何十万人という人が見について、いままさに日本はビキニ水爆反対で核兵器廃絶の運動がほうはいとして起こっているけれども、そうではないんだ、原子力は平和利用もできるのだということ宣伝することによって巻き返しを図ったわけです。

(4) 安齋育郎と原子力

その宣伝に乗った1人が安齋育郎です。1959年に東京で開かれた国際見本市を見にいったら、そこに驚くべきことにアメリカの原子炉が展示してあるではないか。東京の真ん中で原子炉を展示するというのだから、いまそんなことをやったら張り倒されるけれども、当時はまだ日本も原子力攻勢の黎明期だったからそういうことが許されたのです。出力0.1ワットというから豆電球しかつきそうもないが、とにかく立派な核分裂連鎖反応が起こる本物の原子炉が展示してあって、そこで実験もやっていた。安齋育郎が東大に入る1年前ですが、それにひどく感激したわけです。次の世代のエネルギーの担い手になるかもしれない原子力で、放射能に関する実験などもやっていたので、科学の最先端、それも放射能に関する科学ということを深く植えつけられて東大に入ったのです。

東大は最初の2年間は教養学部で、3年目から専門を選ぶのですが、理科1類だったので理学部か工学部を選ぶ。それまでは密かに応用物理工学科にいこうという気持ちもあったのですが、1962年、ちょうど僕が専門に行くというときに東大工学部に原子力工学科がつくられて、最初の学生15人を募集するというので、正力松太郎ラインに埋め込まれた原子力に対する夢があって、原子力工学科15人の学生のうちの1人になった。だから夢と希望を持って原子力工学科へ入って、ものすごくまじめに勉強したのです。

50年前の当時の大学ノートが5冊、手元に残っていることがわかって、それをこの前見てみて驚いたのですが、僕がいかにもまじめな学生だったかがよくわかる。綿密にノートをとっただけ

ではなくて、グラフをコピーしたのを切り取って張りつけたりしてあるのですが、切り取り方も、真四角ではなくて、角を丸くしたりなんかして張りつけて、赤ペンでちゃんと解説までつけている。いかにまじめな学生だったかわかります。

だから、安齋育郎は少なくともその時期は原子力の研究分野に夢と希望を持っていたのです。しかし、一方では放射能が安全なのか危険なのかというのが気になって、専門としては放射線防護学を選び、卒業論文としては原子炉施設の災害防止に関する研究を選び、卒業した後大学院にいて、大学院修士課程のテーマは「尿中のウランの分析」です。この国が原子力をやると核燃料をつくらなければいけない、そのとき労働者がウランに汚染すると大変だ、汚染したかどうかをチェックするには、おしっこのなかのウランの濃度を手軽に調べる方法が必要だということで、その研究は『日本原子力学会誌』に発表されたのです。そのころは一生懸命研究教育に携わっていたわけです。

ところが、1960年はこの国は、皆さんご承知のとおり日米安保条約の改定で始まったわけです。それを日本が受け入れるなかで、日本中に米軍基地が築かれて、いまアメリカの基地がこの国には100以上あるのですが、それは60年代からどんどん増えていったわけです。1964年にアメリカがベトナム戦争を始めて、ベトナムに発進する飛行機は沖縄などの日本の基地から飛び立って行って爆撃をしたわけです。しかもこれまで使わなかったようなパイナップル爆弾とかボール爆弾、くぎ爆弾、枯葉剤とかをばら撒いてきた。そのベトナムの戦場のすさまじい様子が日本で報道されるにしたがって、枯葉剤などというのを開発した科学者、技術者の社会的責任とかが問われるようになった時代でもあったのです。

日本は日本で、池田隼人総理大臣のもとで、所得倍増計画というので重化学工業路線が追求されて、次々と公害や労働災害や薬害が出ていた。そして、労働者や市民のなかに科学者や医者、あるいは企業の社会的責任について問う風

潮が出てきた。その中で1965年に日本科学者会議という科学者の社会的責任の問題を問うような集団が作られて、僕も翌年に東京大学に日本科学者会議東大分会を作ろうというので作って、会員となったのです。

会員となった途端に、驚くべきことに原子力問題の責任者にさせられてしまったのです。なぜかというと、原子力工学科を出た学生として安齋育郎は何といっても歴史上最初の学生なわけで、ほかにいないし、しかもそういう社会的な責任について考えてみようなどという姿勢を持つ原子力学者というのは、安齋か、茨城県東海村の日本原子力研究所の労働組合の中島篤之助さんその他しかいない。東京の本部に近いところにあった東大で学んでいた安齋は弱冠26、7だけれども、日本科学者会議の原子力問題研究委員会の委員長になり常任幹事になった。

そうなると1人のエンジニアとして原子力の科学技術について学ぶだけではなくて、この国が原発をやったらばどういう政治的、経済的、社会的、文化的、科学的、技術的問題が起こるのかという全般を当然勉強することになる。そういうことをやっている、全国の原発立地予定地から、うちへ来て話をしてくれとって呼ばれるようになって、住民に徹底して鍛えられるのです。

北海道の岩内は北海道電力の原発が立地される予定だ、不安だからというので、東京大学から原発問題について考えている放射線防護学者の安齋育郎を呼んでみようというので呼ぶ。それで講演をするわけです。質疑応答の時間になると大変悲惨なことが起こるのです。安齋育郎の専門なんか一切無視した質問が次から次へと飛んでくる。「ホタテの養殖はどうなるか？」知らないよ、そんなことは、学んでもいないわけです。「隣の共和町から来たんだけど、共和町のメロンはどうなるか？」知らないよ、そんなことは。知らないことは知らないと答えるのが科学者としては誠実な対応の仕方なのですが、地元住民はひどくがっかりする。原発をこの町に導入するとどういうことが起こるのか、総合的に解明したくて東京大学から安齋育郎を呼

んだのに、「知らない」と言っているのではどうしようもない。

僕はそれを深く恥じて、原子力畑でやっているためには、やはりいかなる質問、つまり政治、経済、社会、文化、科学、技術のどの面について質問されても答えられるようにしようというので、住民に鍛えられたのです。

その集大成が1972年にやってきた日本学術会議という日本の科学者の公的代表機関です。日本学術会議がどういう意味で公的かということ、今は力が総体的に弱まったといわれますが、日本学術会議は日本の科学の分野を経済学、理学、医学、法学、農学等々七つの分野に分けて、各分野について30人の議員を選ぶわけです。どうやって選ぶかということ、全国の科学者30万人ぐらいの有権者が、全国区と地方区に分けて直接投票によって議員を選ぶ。だからまさに科学者の国会といわれたわけです。

そこが1972年12月に初めて原発問題でシンポジウムを開いたときに、僕が基調報告をすることになったわけです。日本学術会議会員などというのは、とても偉い年配の人で、学会に影響力のあるような人がやっていたわけですが、原発問題の歴史上最初のシンポジウムの基調報告を弱冠32歳の安齋育郎にやれというわけです。つまり原子力工学科を出た一応原子力の専門家であって、原発問題について批判的に政策提言などをやっている日本科学者会議の責任者でもある安齋育郎にやらせようということになってやったのです。

しかし、32歳というのは若くてカッコいいです。国家と電力資本を相手取ってけんかをふっかけた。6項目の点検基準というのを提起して、この6項目の点検基準に照らして日本の原発政策は落第であるという烙印を押したのです。もちろん今度の福島のような事故が起きたらどうなるかということも指摘してありました。原発というのは厄介なことに、地震が来て原発そのものは止まっても、つまり核分裂連鎖反応を止めるように制御棒というのがちゃんと入って核分裂は終わっても、それまでに蓄積されてきた放射能の熱で、ほうっておくと燃料が溶けてし

まう。だから原子炉が止まった後もなお冷やし続けなければいけないけれども、その冷やし続けるポンプの電源が全部失われたらどうなるかということ、福島ではまさにそれが起こったわけですが、もう39年前にそこで議論したわけですが、自分の恩師などが目の前にいるところで、恩師を名指しで批判したりしてやったわけですから嫌われるのは当たり前ですね。

その翌年の73年には、国会の衆議院の科学技術振興対策特別委員会に呼ばれて、専門家として意見を述べると言うので、ここでも原発政策を批判したわけですが。僕は1973年は東京大学の医学部文部教官助手、つまり国家公務員なので国から給料をもらっていたのです。そういう国から給料をもらっている者が、国政の最高機関たる国会に行って国策として展開されている原発を批判するわけですから、それは許されるはずがない。反国家的な反原発のイデオロギーの持ち主として抑圧されるようになる。

同じ73年の9月18・19日と、福島県でこの国の歴史上始めて以来の住民参加型の原発公聴会が開かれた。それまでは公聴会なしで原発をつくっていたのを、我々が文句を言ったものだから初めて公聴会が開かれた。僕は東京にいたから、福島で開かれる公聴会でしゃべる資格はないのだけれども、地元の住民が折衝して、自分たちは地元住民ではあるが原子力の専門家ではないので、自分たちの代表として安齋育郎にしゃべらせてほしいという申請をして、それが認められて僕もしゃべることになった。

しかし、これはまさに茶番劇です。この前、九州電力のやらせメール事件というのがあってみんな少し驚いたかもしれないが、ずっと昔からもっとすごいことをやってきていたから僕は驚かなかったのです。

その公聴会はしゃべりたい人は事前に申し込む。それで、安齋育郎など原発に批判的だったグループは『60人の証言』という本まで作って、60人が違う意見を申請したのです。ところが、推進者側は何千人かが申し込んだ。それは活版印刷刷りの申込書だから、もういい加減なものなのです。傍聴人も事前申し込み制で、われわ

れも数百人申し込んだのですが、推進側は2万何千人か申し込んで、これまた活版印刷刷りで、住民台帳から勝手に名前を書いて出したりしたものだから、申し込んでいない人に当選通知が行ったりして、やらせ以外の何ものでもない。だから、当日は圧倒的多数の推進派陳述人が圧倒的多数の推進派傍聴人の前で意見を述べるという茶番劇が展開されることになったのです。

僕が最もびっくりしたのは、そのときに地元双葉町の婦人会の代表が出てきて演説したのですが、原発の放射能など恐れるに足りないという演説なのです。どういう話だったかということ、今年の高校野球をご存じかという話なのです。今年というのは1973年で、高校野球は8月にもう終わっています。その年はどこが優勝したかということと広島商業なのです。それで彼女の演説は「今年の高校野球は、原爆投下後75年草木も生えないといわれていた広島で生まれ育った子どもたちが、元気よくわが福島県代表の双葉高校を11対0で破るなど快進撃を続けて全国制覇を遂げた。だから広島原発など恐れるに足らず。ましてや平和利用である原発の放射能など恐れるに足りない」という演説なのです。

僕は国防婦人会が出てきたかと思ってびっくり仰天したのですが、そういうことを経験していると、九州電力のやらせメール事件などかわいという感じになってしまう。本当はもっと怒らなければいけないのでよくないのですが、そういうことがあったのです。

それで、東大の医学部の研究室で、僕は1973年から79年3月28日のスリーマイル原発事故が起こるときまでは徹底していじめられた。助手だったけれども、教育業務は一切外されて、研究費はなくなった。研究費がなくても、紙と鉛筆があれば研究はできるのですが、研究発表も教授の許可なくしてはいけいと言われた。これは無視しました。それから、安齋育郎と口をきいてはいけい。教室員が十何人いるのですが、一緒に並んで歩いてはいけいし、一緒に飯を食ってはいけいし、一緒に写真に写るなどというは最悪の事態で、今日のように講演に来れば、安齋番という人がちゃんと尾行をして

きて、一部始終を録音して、その日のうちに主任教授に届けることに決まっていた。

その人はT君という東京電力から来ている医者で、原子力発電の作業に携わる人の健康管理をするための医者ですが、原子力について学んだことがないというので、研修してこいという名目で東京大学医学部のその教室の僕の左隣に座っていたのです。この人はわりに正直な人で、辞めるときに、僕の役割は安齋さんが原発問題について次に何をやろうとしているかを偵察する係でしたと言ったわけです。それを世間ではスパイというのですが、そういう人がいました。

それから、教室員が全員集まってこういう興味深い論文が出ているとってお互いに紹介し合う会議があるのですが、僕の見解が週刊誌などに出ると、論文消毒会といって、主任教授が週刊誌を持ってきて、そこで声を荒げて安齋育郎を罵倒するというようなことがたびたびでした。

一番傑作だったのは、僕は研究発表してはいけないと言われていたけれども、それを無視して研究発表をしていたので、学会では若手の研究者にそれなりに人気があったのです。研究費がこないから紙と鉛筆でやる。だからきわめてユニークな理論的な研究などをやっていたのでけっこう人気があって、学会の理事の選挙では、僕をいじめていた主任教授よりも僕の方の票が多かったりして、いつも上位で当選していた。だから1975年か76年には僕はもう学会の三役の1人だったのです。会長、副会長はさすがにさせてくれなかったが、庶務理事兼事務局長という役目だったのです。学会へ行くと、僕が三役の席に座っていて、うちの主任教授は平の席に座っているわけだからそれは機嫌もよくないわけです。

ある理事会の帰り、東京電力から選ばれている星野雅之さんという理事の人が、「安齋君、今日いっぱいどう？」と言うので、「いいですよ」と言ったら、東京の江東区、深川森下町のみこのやという馬肉料理屋に連れ込まれて、そこで鍋を突っついたりビールをついだりしながら話を始めるわけです。

東京電力が原発反対派の安齋育郎を呼んだの

だから、世間話をするために呼んだはずはない。何か言いたいことがあるに決まっているのですが、なかなか言わないのです。最後のほうになってやっと言ったのは、「安齋君、家族ぐるみで3年ばかりアメリカに留学してくれないか。費用は全部東京電力が出すから」と言うわけです。要するに目障りだから消えろという意味ですね。僕が地方の原発反対運動なんかに行くと演説すると、その影響を消すためにすぐに何千万円という金がかかってしまう。それなら安齋育郎を追い出したほうがよほど安上がりなのです。

そういう批判的な科学者が何人もいるけれども、僕がどれくらい嫌われていたかということ、川崎敬三という人がやっていたお昼の番組があったのです。それで一度、田中角栄元内閣総理大臣のおひざ元の柏崎刈羽原発の住民と、当時の科学技術庁長官の森山欽司という人が、その番組のなかで対話をするというか、対決するというのをやることになった。しかし、一方は科学技術庁長官で片方は地方の地域住民ではつり合いがとれないとあって、ディレクターが「安齋さん、悪いけど住民側の味方で出てくれないか」と言うので「いいですよ」と言ったのです。ところが、本番の前の日になって出演を辞退してほしいと言うのです。向こうから頼んできたのを何だと思って、どういう理由か聞いたら、森山欽司科学技術庁長官が相手が安齋なら俺は出ないと言っていると言うのです。僕は科学技術庁長官にさえ嫌われていたのです。

それから、1975年に原子力工学科ができた15周年の記念パーティーがあったのですが、そのとき科学技術庁から来賓できた人があいさつをして、東京大学工学部原子力工学科は幾多の優れた技術者を輩出した点で高く評価されるが、一方で安齋を生み出したということで見ると功罪相半ばすると言ったというのです。すごいですね。1人の力というのはけっこうなものなのです。

それでも1979年3月になってスリーマイル原発事故が起こると、うちの主任教授も、安齋が普段から原発は危険なこともあるということを言っているのもあながち嘘ではないらしいとい

うことに気がついて、その後、教授室に呼んで、君と僕とは生涯よい論敵でありたいなどと言い出して、少し市民権を得たのですが、結局何のことはない、1986年の3月31日まで17年間は助手のまま据え置かれて、子どもを2人抱えてなかなか厄介な時代でした。国立大学の場合は俸給表というのがあってだんだん上がっていくのですが、最後は1年に2,000円ぐらいしか上がらなくなってしまったのです。

それでも何とか耐え忍んで、いくつもの妥協はしたに相違ないけれども大筋であまり妥協しなかったのは、東大の中では孤立無援だけれど、外へ出れば日本科学者会議の志を同じくするような科学者がいっぱいいるということを知っていたし、学会でも若手に支持されていて、学問的にもサポっているわけではないというプライドもあった。それから、自分自身の信念ももちろんありました。生き方を曲げてまで教授にひざまずいて上に行こうとするのは嫌だということと、四つ目が一番大事ですが、配偶者がよく支えてくれたというのがあります。大学でいじめられて、家へ帰ったら「あんた、何やってるのよ！」なんて言われたらたまったものではないけれども、よく支えてくれたということがあります。

(5) 原発を強力に推進させた二つの仕掛け

この国の原発がこんな状態になったのは、アメリカのエネルギー戦略に乗って、日本政府がそれを受け入れ、電力企業がそれと結びつき、安全行政とやらを進めるために官僚機構が役割を果たして、安全だというお墨付きを与えるために専門家が動員され、しかもそれを国民の安全神話として振りまくためにマスメディアが利用された。そしてもう二つ、一つは田中角栄内閣時代につくられた電源三法（電源開発促進税）という法律です。今日も電気をいっぱい使っていますが、1,000キロワットアワー使うと375円、電源開発促進税という税金がいまでもその法律によって自動的に取られているのです。それは国庫に自動的に納まって、1年間に税金は全体で3,500億円ぐらいになるのです。

それを財源として、原発を引き受けてくれた自治体には自動的に褒美として特別交付金というのが配られる仕掛けになっていて、3年間で数十億円出るので。我々はこれを「原発の引越しそば」と呼んでいるのですが、1杯食べると3年間はいい。ところが、3年経つとこなくなるから腹が減る。それでもう1杯食おうかということになって、1基原発を引き受けると大体四つぐらいまで増えていくという仕掛けがつくられているのです。だから地域開発の展望を持ちにくいような自治体が、こぞって原発を誘致するということになっていったわけです。

おまけに民主主義の国だから、自治体の首長が呼んだというのではなくて、住民もそれを望んでいるというかたちをとらなければいけないから、原発推進の住民組織がつけられたわけです。今事故が起こっている福島県双葉郡には「明日の双葉地方をひらく会」というのが組織されて、住民たちが掲げたポスターがいまでも残っていますけれども、私たちの力で原発建設を促進し、豊かな双葉地方を築いていこうと、住民そのものが原発を誘致する側になった。

そういう組織ができると、あの家は原発賛成派、このうちは反対派というのがわかってしまうものだから、あんな奴と一緒に祭りができるかという話になって地域社会が崩壊してってしまうわけです。高知県の窪川は原発を食い止めたのですが、そこへ行ったときは、被差別部落のなかでも賛成派と反対派で対立が起こって、人々の団結に亀裂が入っていくのでなかなか厄介なことでした。

こうして、先に言った六つに自治体と住民も加わって、この国に国民総動員原発促進翼賛体制というのができ、“原子力村”とでもいうべきものができていって、それに批判的な安齋育郎みたいなのは村八分にして村から追い出す。

村八分といったのは、昔、村がやることが十分あると、そのうちの八分までははじき出されるのだけれども、二分だけは残っていた。火事的时候は手伝ってもよかったし、葬式的时候は行ったのです。いま福島はたぶん火事が起こっているのに相当すると思うのですが、安齋育郎

に一向にお声がかからないから村九分体制かもしれないが、とにかく反対派は追い出されて、「原子力村」の人々がまったく批判のない、緊張感のない、仲間たちだけの状況のなかでいろいろやってきて、崖っぷちから落ちこちてこうなってしまう。ここまでが今日のレジメの1「福島原発事故を防ぎ切れなかったこと、申しわけなく思います」です。

これから専門の放射能の話に入ります。

2. 基本認識：放射線は被曝しないに こしたことはない

(1) 放射線の影響

放射線はいまみんなが気にしています。特に乳飲み子を抱えた若いお母さんたちは、心配で食生活にも身が入らないというような状況があるのです。放射線を浴びると何が起こるかという、確定的影響と確率的影響という二つの種類の影響が起こるといわれています。学者は名前のつけ方が難しいのです。確定的と確率的では字一つしか違わないのに、意味が決定的に違う。

僕は腰痛の気があるのでよく散歩をします。家のそばの坂道を一回りすると4,300歩あるのですが、途中にここから先は細い道で車がすれ違えませんかという意味の看板が立っているわけです。「この先幅員減少離合困難」と書いてあって、小学生なんか何のことやらわからない。道が狭いのですれ違えませんか書けばいいのに、学者とか行政官というのはわけのわからない言葉を使うものです。

僕が東大の医学部のときに、医者をかからかってやろうと思って、「キスというのは何と言うんですか？」と聞いたら「弓状筋肉の収縮状態における構造的並列」と言いました。唇が段違いではいけないので並列ですが、こうなるとわかるころまでわからなくなってしまう。

NHKで昔「とんち教室」というラジオの番組がありました。今、頷いた人は相当年の人ですが、分かりにくいことを分かりやすくするというクイズがあって、長崎抜天とか石黒敬七というような人たちが出ていて、「カレーライス」と

いうお題が出たのです。このときの長崎抜天の答がおもしろかった。「インド産コショウ振りかけどろどろ飯」。これは分かりやすい。こうでなくてはいけないのですが、学者が書くと「確定的影響」「確率的影響」ですから分かりにくい。

確定的影響というのは、一度に大量に放射線を浴びると死に至るような急性の放射性障害が起こるということで、一度に大量にというところがキーワードで、下手をすると死ぬわけです。「広島・長崎」ではそういう死に方をした人がいっぱいいたわけです。

幸い福島では一度にどばっと浴びて命にかかわるようなことはまだ起こっていないのです。だから今の時点で事故を見事におさめれば、確定的影響で命を失う人は出ないで済むかもしれない。これはチェルノブイリ原発事故と違うところで、チェルノブイリは消防隊員が突入して行って、31人が確定的影響で死んでしまったのですが、福島はそうならなくて済むかもしれない。

かもしれないとちょっと不確定なのは、余震が襲ってくる危険がまだあるわけです。今度の地震はマグニチュード9でした。マグニチュード9というのは阪神大震災の350倍です。歴史上でいえば、1923年9月1日に関東大震災というのが起こって14万人が死にましたが、今度の地震は破壊力が関東大震災の45倍なのです。だからどえらい地震なわけですが、マグニチュード9の地震が起こると、余震のうち一番大きいものは、それ引く1でマグニチュード8ぐらいの余震が起こることがあり得るとというのが地震学者の見解なのです。マグニチュード8といえば阪神大震災よりも大きいから、せっかく冷却系がうまく働き始めたといっていながら、本震でガタがきた設備が次の揺れでどうなるかという不安があるので、完全に油断はできない。

僕は、3月11日の事故の日の夜以来、何か言いたいことはないかとマスコミに聞かれると、「隠すな、うそつくな、意図的に過小評価するな」と言い続けてきたのです。過小評価は、情報がよく分からないとき結果として過小評価になることがあるのですが、意図的に過小評価をする

など言ってきたのです。これは依然としていまでも必要なので、皆さんからも言い続けてほしいのです。見事にそれができて余震にも耐えられれば、この確定的影響で命が失われることはなくて済むかもわからない。

確率的影響 ところが、厄介なのは2番目の確率的影響で、少しずつだらだら浴びることがいま起こっているわけです。それでも何も起こらなければいいのですが、将来がんや白血病で死ぬ確率が増えるといわれているのです。確率というのは割合という意味です。

ここにいる人も死にたくなくてもいずれ全員死ぬのです。これは100%の確率で予測ができます。死ぬとき、日本人の場合はいま大体30%はがんで死ぬわけです。何が原因で死ぬかというのは時代によって変わって、江戸時代は労咳といって肺結核で死んだりしましたが、いまはがんで死ぬ人が約3割いるわけです。放射線を浴びるとそのがんで死ぬ割合が少し増えるかもしれないというわけです。

確率というのはわかりにくいので、僕は「がん当たりくじ型影響」と言っているわけです。放射線を浴びるとというのはがんが商品として当たる宝くじを買うようなものだという意味です。宝くじと放射線のがん当たりくじは決定的な違いがあって、宝くじは当選発表日が決まっているわけです。何月何日何時何分に、くるくる回る円盤に矢を突き立てて当選番号が決まると、買っていた番号と比べてみます。違うと悔しいけれども、違ったということが確認できて、無効だと破いて捨てることもできるのですが、放射線のがん当たりくじはほぼ生涯有効の宝くじで、当選発表は商品発送をもってかえさせていただきますというタイプのものなのです。

浴びた本人も忘れたところに、あなたが20年前にお買い上げの放射線がん当たりくじで、このほどめでたく肺がんにご当選しましたのでお送り申し上げますと、いきなりがんが送られてくるというタイプのものなので、誰も買いたくないのに電力会社が何億枚かばら撒いてしまったというわけです。嫌らしいったらありゃしないわけですが、近くに住んでいる人は強制的に

数十枚から数百枚買わされてしまった。60キロも離れた人口28万の県都福島市でさえ1人何枚かずつ買わされて、依然としてがん当たりくじが野山にばらまかれた状態になっているので、これを何とかしなくてはいけないわけです。

どれくらい当選するかというと、100ミリシーベルトで0.5%がんが増える程度だと書いてあります。宝くじがどれくらい当選するかは身をもって知っていますね。この会場で1億円当たったことがある人はいませんね。これから出るかもしれませんが、いま盛んに売っている年末ジャンボ宝くじの1等の当選確率は約500万分の1だといわれています。これは10キログラム入りの米袋を10袋買ってきて、そのうちの1粒を取って赤い印をつけて放り込んで混ぜて、目隠して1個取ったらそれがたまたま赤かったというのが1等の当選率です。だから当たりそうもないのですが、誰かが当たっているから、誰かが俺であってもおかしくないと思ってみんな買うわけです。

放射線のがん当たりくじは、100ミリシーベルト浴びるとがんで死ぬ人の割合が0.5%増える。どうということかということ、1,000人いるとすると、放っておいても平均して300人はがんで死ぬ。ところが、死ぬ前に100ミリシーベルトずつ浴びせると、がんになる人が300人ではなくて305人になるということです。印象としては大したことないという感じもあります。もともと1,000人のうち300人ががんで死ぬのが、100ミリシーベルト浴びても5人増えるだけ。100ミリシーベルトというのは相当の量です。1ミリシーベルトとなるとその100分の1だから、0.005%増えるというのですが、これは統計の変動のなかにおさまってしまっただけで数の上であまり定かに見えないかもしれない。そんな程度だから、ちょっと福島へ行ったら俺は必ずがんで死ぬのだとか、がんで死なねばならんのだとか、そんな深刻なレベルでないことは明らかですが、いずれにしても増えるほうにいくので嫌なわけです。

しかし、世間には放射線を少し浴びたほうが良いと言っている科学者もいるのです。近畿大

学名誉教授の近藤宗平さんは、イギリスの放射線科の医者は一般診療科の医者よりも長生きしたとか、アメリカの原子力船の修理工は一般の船の修理工よりも長生きしたとかいうデータを集めて、放射線は少し浴びた方が体にいいというわけです。

放射線を浴びるとDNAに傷がつきます。そうすると、それを修復するためのDNA修復酵素系が活性化していわば救急医療体制ができるので、その分抵抗力が強くなるという説なのです。放射線ホルミシスという説です。それはそれで、別に研究としてやってくれてもいいのです。いずれ放射線は少し浴びた方が体にいいということが分かっても、我々に何の不利益もない。福島の人は少し浴びてよかったねということになるだけの話です。

そうではなくて、逆に放射線を浴びると、そういうホルミシス効果の一方で、どんどんDNAに傷がついて、修復酵素系が直せるうちはまだいいけれども、傷が蓄積すると直し損なったりして、それががん細胞化したりする恐れがあるということも一方でいわれているので、全体としてはやはり放射線は浴びないにこしたことはないというのを放射線防護学の原則にしているわけです。

(2) なぜ子どもは大人よりも放射線から守られるべきなのか？

子どもはもっと大事だというわけですが、なぜ大事かという四つの理由があるのです。その1、ベルゴニ=トリポンドーの法則と書いてあります。人間は何兆個という細胞できていて、この瞬間にも1秒間に何千万個という細胞が新しく入れ替わりつつある。細胞というのは年中細胞分裂しているのです。じっとしている休止期と細胞分裂をしている分裂期というのがあるのですが、分裂しているときは放射線に弱い、つまり放射線感受性が高いというわけです。

それから、人間の体は最初は受精卵1個から始まって、それがいろいろ細胞分裂していつ、骨になるとか目になるとかだんだん分かれていきます。それを分化というわけですが、その

分化の程度が低い細胞ほど放射線の感受性が強い。子どもは大人に比べるとまだ未分化の状態だから、子どもの方が感受性が高いといわれているわけです。それはベルゴニとトリポンドーという2人の科学者が気がついたことなので、そう呼ばれています。

2番目に、子どもは平均余命が長い。先行きいっぱい生きて、僕はいま71歳です。あと何年生きるかわからないけれども、京都に瀬戸内寂聴という人がいて一緒に憲法の運動などをやっているのですが、この前恐るべきことを言った。あの人は89歳ぐらいで、あと20年しゃべりたいと言ったから、110まで生きる気です。そうすると僕はあと40年ぐらい生きなければいけないわけですが、それでもせいぜい40年。子どもはこれから70年も80年も生きて、長く生きればそれだけ被爆のチャンスが多いから、子どものうちはなるべく浴びないにこしたことはないわけです。

それから、浴びてから後が長いので、潜伏期をこえて実際にがんになる割合が高くなる。僕がいま放射線を浴びて20年後にがんになるといっても、ほかの原因でとっくに死んでしまっているかもしれないので、安齋育郎ぐらいのロートルが浴びてもあまりどうということはないかもしれないが、子どもはいけない。

3番目はちょっと専門的なのですが、同じベクレル数の放射能が入っていても、それをシーベルトという被曝線量に直すときに、最後は臓器の目方で割り算をします。僕はいま67キログラムあるが、うちの孫は6.7キログラムぐらいしかないので、同じベクレルだけ体の中に入ってきてても、被曝線量で計算すると、最後は体重で割り算するから10倍影響が大きくなるのです。そういう意味で子どもはよけい大事にしたほうがいいといわれているわけです。

3. 放射線防護の基本

(1) 「浴びない」「取り込まない」が大原則

放射線防護の基本は単純で「浴びない」「取り込まない」が大原則です。放射線を浴びるのに

は二つの浴び方があって、体の外から浴びるのを外部被爆といいます。それから、放射性物質を含んでいる例えばホウレンソウを食べてしまって、体のなかでそれがベータ線とかガンマー線を出して被爆するのを内部被爆というわけです。外部被爆を防ぐにはなるべく浴びないようにするということが一つ、それから体の中に汚染したものをなるべく取り込まない。これが大原則です。浴びないにこしたことはないという単純なことに尽きるわけです。

外部被爆を防ぐには、放射線を出すものを取り除けというわけです。放射線を出すものがそこにあるのに、それを取り除かないで距離だけ稼ぐとかいうのはだめで、放射線を出すもの自体をまず取り除くということです。

内部被爆を防ぐには、体のなかに取り込まない。なるべく放射性物質を飲んだり、吸ったり、あるいは傷口から体のなかに取り入れたいしないようにする。例えばヨウ素剤というのがあります。原発ではヨウ素131という厄介な放射性物質が大量に出てきます。ウランが原子核分裂すると、ヨウ素131というののできやすいのです。しかも揮発性で、天空高く舞い上がって、舞い降りてきて、呼吸などと一緒に体のなかに入ってくる。

入ってきてもすぐ出せばいいのですが、喉のところにある甲状腺というところに取り込まれやすいのです。甲状腺というのは甲状腺ホルモンという新陳代謝にかかわるホルモンをつくっている小さな臓器で、僕でも20グラムぐらいです。そこにヨウ素131が取り込まれてベータ線やガンマー線を出すと甲状腺がんになる。チェルノブイリ原発事故でも、18歳未満でヨウ素131を吸い込んだり飲み込んでしまったりした子ども4,000人以上が甲状腺のがんになったのです。

ついでに言うておくと、死んだ人が15人しかいないことになっているのです。おかしいと思いませんか。4,000人以上が甲状腺がんにかかったのに、死んだのは15人しかいないというのはなぜかという、甲状腺がんだとわかった時点で甲状腺をとってしまった人が多いのです。甲状腺をとると甲状腺ホルモンがつくれなくなっ

てしまうので、甲状腺ホルモン剤を一生飲み続けなければいけないのですが、甲状腺をとっても死なないので、甲状腺がんだとわかった時点でとってしまった。とってしまえば甲状腺がんになりようがない。しかし、一生甲状腺ホルモンを飲み続けなければならぬので厄介ですが、18歳未満でヨウ素を浴びただけでも4,000人以上ががんになった。

だから問題なので、そうなりたくないというので、事故が起こったら放射性のヨウ素がやってくる前に、放射能を持っていない普通のヨウ素剤を先に飲んでしまう。そうすると甲状腺がヨウ素で満タンの状態になるので、後から放射能を持ったヨウ素がきても、間に合ってますというのでためないで捨ててしまうというわけで、ブロックする効果があるのです。

甲状腺ホルモンというのはヨウ素が必須の元素で、ヨウ素がないと甲状腺ホルモンがつかれないものだから、甲状腺は、放射能を持ったヨウ素だろうが持たないヨウ素だろうが、材料がきたらみんなため込むくせがあるのです。だからあらかじめ放射能を持っていないヨウ素で満タンにしておこうという作戦です。

ほかには体のなかに取り込まない方法はあまりない。体の中に取り込まない唯一の方法が、汚染した食品を食べないということです。そのために国が暫定規制値を決めているのですが、ホウレンソウとか稲ワラ牛肉が出回ったりしているわけです。

(2) その上で、放射線から身を守るには？

その上で放射線から身を守るということで、まず「外部被爆から防ぐには？ 一遮蔽、距離、時間」と書いてあります。一番大事なことは、降り積もっている放射性物質を取り除くというのが大原則です。「浴びない」「取り込まない」が大原則で、外部被爆は放射線を出すものを除くというのですから、地べたを削ることがいま大事なのです。いまは放射能が天から毎日降ってきているわけではなくて、3月11日の事故の後、数日間にけた外れのどえらい放射能が水素爆発で出て、それが風と雨で落ちてきて、地表の数

センチのところではつかまっているのです。これは雨が降っても簡単に流れていくような代物ではありません。

福島の土を持ってきて安齋科学平和事務所でも実験をしました。大量の水をかけると水に溶けてくるかどうか観察しましたが、ほとんどまったく溶けてこない。土がイオン交換樹脂みたいにセシウム137をしっかりとかわえ込んでしまっているのです。特に福島の土は粘土質で、粒子が細かい。粒子が細かいということは表面積がべらぼうにでっかいということで、しかもマイナスの電気を帯びているので、そこにプラスの電気を帯びたセシウムなどを引きつけている。それから、電子顕微鏡で見ると土の表面というのは複雑な格好をしているので、そこにセシウムが引っかかるなどして、水をかけたぐらいでは簡単に出てこない。だから大雨が降っても土のなかの放射能が簡単に洗い流されて消えていくということはない。

というのはありがたい面とありがたい面があって、ありがたい面は、福島の田んぼは汚染しているけれども、水に溶けてこないから、そこで稲を栽培しても稲も吸い上げようがない。だから、今年福島で獲れた米は、最近二、三基準値より上のものが見つかっていますが、99.4%は基準の5分の1以下、つまり1キロ当たり100ベクレル以下でした。

では田んぼは汚染してないのかというと、田んぼは汚染があるけれども、稲には出てこない。だからヒマワリ除染作戦も福島ではだめです。チェルノブイリの土は福島と違うので水に溶けてくる。だからヒマワリが吸い上げてくれたけれども、福島の場合は水に溶けてこない。ヒマワリは土を吸い上げるわけではないのでだめで、結局地べたに残っているのです。だからこれを削り取るしかない。

福島ではグラウンドなどを全部削ったのです。僕は3月から削れと言っていたのですが、やっと削りました。削ったのをどこへ持っていか。郡山の人で、間違っって削ったのを産廃処分場へ捨てにいった人がいるのですが、産廃処分場の地元の人に叱られるに決まっています。グラウ

ンドを掘ったら、その表層土をグラウンドの横に掘った深さ2メートルぐらいの穴に埋めて、表面にビニールシートをかけて立ち入り制限しておけば、それで大丈夫なのです。

それをやれば明らかに減ります。5月8日に福島へ行ったときに、保育園のグラウンドを借りて実際にやってみたのです。保育園の人にわかってもらおうと思って、ガイガーカウンターを子どもの生殖腺ぐらいのところに置いておいて、下の土を50センチ、1メートル、2メートル、3メートルと削って、放射線がどのぐらい減っていくかグラフを描きながらやっていると、3メートル削っただけで3分の1ぐらいに減りました。保育園の関係者の方も削れば減るんだというのがわかって、子どもたちの被爆を防ぐためにというのでグラウンド中全部削ってもらって、10月初旬にはそこで運動会もできました。だから削ることです。

厄介なのは、野山は削りにくい。福島の7割ぐらいは野山です。しかし、削らない限り減らないことも確かで、半分に減るのにほっておくと30年、1,000分の1に減るのに300年、100万分の1に減るのに600年かかるわけです。ほうっておくとこれから何十年、何百年と放射能とつき合わなければいけないので、人の出入りのあるところはやはり削ったほうがいい。森林地帯で削れないところもあるけれども、人間がアクセスしたり利用したりする地域、都市部に近接した里山とか福島市内にある花見山公園とかいうところは何万人も行きますから、優先順位1位にして、これから10年かかろうが20年かかろうが30年かかろうが、少しずつでも削ることが大事です。

それでもできない場合は、保育園のなかで測ってみても、窓側はグラウンドから放射線が来るからやはり高いので、そういうときは遮蔽をするわけです。それは放射線を食い止めるためにロッカーなどをそこに置く。あるいは2リットル入りのペットボトルに水を入れて窓際にずらっと並べれば、それでも少し食い止めることができます。

距離は、窓際よりは部屋のなかに入ったほう

がその分被爆が少なくなります。それから時間は、被爆量が高いところになるべくいないようにする。遮蔽、距離、時間の三つがこの順序で大事です。

内部被爆を防ぐには？ 内部被爆を防ぐには、「下剤など」と書いてありますが、取り込んだら体にためておかないで出す。

この前NHKの「あさイチ」に出たときに、NHKがばかにリンゴペクチンが体にいいと言いたがっているのです。チェルノブイリで、セシウムで汚染した食事を食べているグループを二つに分けて、片方はリンゴペクチンというのを食べさせ、片方は食べさせない。

リンゴは最初表面が硬いのですが、だんだん熟れてくると表面がやわらかくなります。うんとほうっておくと腐ってしまうのですが、あれは皮と実の間にペクチンというのがある、最初は巨大な分子なのですが、それがだんだん分解してきて分子量数万から数十万ぐらいになると、程よい柔らかさになります。そういうリンゴペクチンを食べると、消化管にあるセシウム137などをその分子が引っかけて出口まで運ぶという掃除人の役割を果たしてくれるのです。

しかし、出口までしか運んでくれないから便秘の人はだめなのですね。出口で長逗留されたら大腸が被爆して大腸がんになる恐れがあるので、大事なのは便秘しないということです。僕はNHKにリンゴペクチンの話はやめろと言ったのです。その話をやったら案の定リンゴペクチンが売り切れてしまいましたが、食物繊維ならいいのです。歩け歩けを含めて適度な運動をして便秘をしないことが大事です。

被曝線量はどのように測定するのか？ 測る方法ですが、体の外から浴びるのを測るには、1時間当たりそこにどれぐらい放射線が来ているかというのは、サーベイメーターというので測ることができます。これはネット上で買うと1万円ぐらいから、われわれ専門屋が使う高いものは数十万円します。同じ場所で測っても機械によって全然測定値が違う。一けたぐらい簡単に違いますから、他人が測った機械のデータと自分のデータが違うからといって簡単にがっ

かりしないでください。どちらかが間違っているか、あるいは両方間違っているかどちらかなので、行政などの標準的な測定器を持っているところへ行って同じ場所で測ると、この機械ではいくつに出る、この機械はいくつに出るといふ換算係数がわかります。そういう換算係数を見極めないと簡単に比べられません。

それから、合計どれだけ浴びたか測るのが積算線量計です。これも何万円かで売っているのですが、今はなかなか入りにくいようです。

体のなかにどれだけ放射線が入ったかを知るには、オールボディモニターというものがあります。体のなかに入ったセシウム137は、体のなかでベータ線とガンマ線を出します。ベータ線は体の中で止まってしまって外へ出てきませんが、ガンマ線は出てくるのです。だから、体の外に感度のいい測定器を置いて、その人の体からどれだけガンマ線が出てきているかを測定すると、中にどれだけ入っているかが概ね分かるというわけです。これは何千万円もする機械なので、各家庭に1台というわけにはいきません。

簡単には、バイオアッセイといって、おしっことかつばとかウンチとか血液を測って推定しようという方法がありますが、これもはなはだ難しいです。おしっこに1リットル当たり何ベクレル出てきたから、では全身がどれだけ浴びたかというのを計算するのは、仮説が山ほどあって、平気で二けたぐらい違う恐れがあります。内部被爆は測るのが難しいのです。だからこそ内部被爆をなるべく起こさないように、放射性物質を取り込まないようにしようというわけです。

4. 外部被曝から身を守るには？

外部被曝から身を守るには四つです。土を削る。あるいは、屋上などは雨が降ってきて汚染しているので、そういうところはよく洗う。洗うと結局洗った水は下水を通して下水処理場に行って、下水処理場の汚泥が放射線で汚染されるのです。それをどう最終処分するか早く決めろと言っているのですが、まだ決めていない。いま東京都が瓦礫を50万トン引き受けるとか、

愛知県も引き受けるとか言っているけれども、僕はやめたほうがいいと思っているのです。福島原発の周辺地域には、ここ100年ぐらい使いものにならないほど汚染している地域があるので、そこに集中的に集めておくのがいいのです。危険物は集中管理するか分散するかどちらかなのです。集中しておけば、いい方法が見つかったときにそちらに切りかえることができますが、分散してしまうとえらいことになってしまうので、僕は集中したほうがいいと思います。

5. 内部被爆から身を守るには？

内部被爆から身を守るにはどうしたらいいかということ、汚染食品をなるべく食べないようにする。そのためには政府にも頑張ってもらわないといけません。暫定基準値を決めたはいいけれども、ハウレンソウが1万9,000束ほど基準値を超えて出てきたとか、汚染稲ワラを食べた牛肉が、沖縄を除く46都道府県に出回ったとかいうことでは困る。基準を決めたら守ってもらわなければいけない。基準そのものをもっと下げろという要求もあるのですが、今の基準さえ守れないような政府に基準を厳しくして守れるはずがないので、まずは今自分たちが決めた基準をしっかり守ってみせろと言いたいわけです。

そのためにはしっかり測らなければいけないのですが、行政にも限度がある。民間の検査会社に頼むと1検体当たり1万8,000円ぐらい取られるので、予算が足りない。それで、生活協同組合とか農民組合とかは、もう任せていられないというので、ワンセットそろえると5,000万円ぐらいかかる機械を買い入れて、自分たちが扱うものは自分たちで調べるということやっているグループもあります。それはそれで一つの方法です。

僕はもっと学者を使えと言いたいのです。安齋育郎のような放射能の専門家がこの国に何千人もいるのです。日本保健物理学界とか日本放射線技術学会、日本放射線影響学界、放射線安全管理学会、医学放射線学会とかいっぱいあって、そういう学会を束ねているのが日本学術会

議という政府機関なので、政府からちゃんと要請して、関連する放射線の学会の会員には、ここ二、三年は食品の安全管理のために検査に協力をお願いします、もしそういうことで研究をやるなら重点的に予算の配分をしましょうとかいうことをやればいい。僕の事務所でもあるぐらいだから、もうすでに測定器を持っている何千人という科学者は協力しようと思えばいくらでもできるわけです。

6. どれぐらい被曝する？

僕は4月16日に初めて福島に入れたのです。3月11日のすぐ後に行きたかったのですが、マスコミ攻めにあって、やっと行けたのが4月16日です。なぜ行けたかということ、僕の71歳の誕生日だったからです。誕生日ぐらいは女房と飯を食うかもしれないと思って、すべての講演依頼を断って空けておいたら、その日しか行けなくなりました。

原発の7キロ地点まで近づいて、放射能で汚染した土を集めたり、放射線を測ったりして22マイクロシーベルトぐらいですから、1回の胸のレントゲン撮影の半分ぐらいです。集団検診で学校とか会社で1回撮ると、機械によって違いますが、大体50~60マイクロシーベルトぐらい浴びるのですが、僕は8時間ぐらいでその半分ぐらい浴びたということです。

宇宙飛行士がこの前長期滞在から帰ってきましたが、宇宙飛行士というのは浴びるのです。宇宙に対する夢を損なってはいけないということなのか、あまりテレビでは言いませんが、レジメに書いたように、35歳で初めて宇宙飛行士になる人は、生涯宇宙で浴びていい限界が男の場合1,000ミリシーベルトです。1,000ミリシーベルトというのは、いま東京電力の職員が緊急作業をやっていますが、その限度が250ミリシーベルトですから、それよりもずっと高いので、宇宙飛行士になりたい人は浴びるのを少し覚悟しておいてもらわなければいけません。

1960年代にはどれぐらい浴びるかよくわからなかったものですから、精子銀行(スパムバン

ク)というのがあって、宇宙飛行士になる人は、不妊になるといけないからというので精子を預けていったのです。それぐらいなので、何ごともいいことがあれば悪いこともあるので、両方をちゃんと教えなければいけないのですが、原発はエネルギーのもとですとか、いい面だけ教えがちなのですね。

内部被爆が怖がられるわけですが、1キログラム当たり500ベクレルという基準目いっぱいセシウム137で汚染している牛肉を200グラム食べるとどれだけ被曝するかというのは、直ちに計算できるわけです。計算すると0.0015ミリシーベルトだとわかる。実は毎日食べているもののなかにも天然の放射性物質が入っていますが、特にカリウム40という天然の放射性物質だけで、1年間に0.2ミリシーベルトは全員いや応なく受けているわけです。この瞬間にも1秒間に4,000発ベータ線やガンマ線が出ているのです。

だから放射能からまったく無縁の生活というのは生きる上であり得ないのですが、新たに人工的な放射能を取り入れたくないわけです。人工の放射能と自然の放射能とどちらが危険かというと、同じです。細胞にしてみれば、いま自分を横切ったのが自然の放射能か人工の放射能かなどというのはわからない。両方とも同じように被害を受けるので、両方浴びないにこしたことはないということでは確かです。

アメリカは石造りの家が多いのですが、石から天然の放射性物質のラドンガスというのが出てきて、肺がんになっている人が1年間に1万人以上いるといわれているのです。だから自然放射能が無害だということはないのです。

7. 何よりも実効的な対策の重要性

—「過度に恐れず、事態を軽視せず、
理性的に怖がる」

1番の「起こってしまったことはひとまずおいて」というのは、環境にばら撒いてしまった放射能は、今おまじないをかけたから引っ込むというものではないわけです。だから、とにかくそれからの被曝をどう減らすのか。がん当た

りくじがばら撒かれた状態になっているのだから、それは片付けなければいけない。誰の責任においてかというのと、ここにいるすべての人の責任においてです。

安齋育郎は反対してきた、54基の原発をつくったのは僕でないことは確かだけれども、そんなことは威張れない。結局、政府を説得することに失敗し、人々が原子力を選ぶことを食い止められなかったのだから共同責任です。被害を受けるのは我々ではないのです。安齋育郎は他の病気でさっさと死んでしまうかもしれませんが、子や孫や次世代以降の人々が被害を受けるのです。だから何とかしなくてははいけません。

2番はがん検診などをしっかりやるということです。これから福島でがんが増える危険性があるけれども、がんはいち早く見つければ治せるわけです。僕は東大医学部の助手のときに、東京医科大学の客員助教授になって胃がんの研究をやりましたが、胃がんなどは早期に発見すればほとんど100%治せます。がんになるかもしれないが、いち早く見つければ治せるのだということです。

つい数日前、大江健三郎さんと被爆者の肥田舜太郎さんとかと一緒にあるところで討論をしたときに、94歳の広島被爆者、肥田舜太郎さんが「広島の被爆者であるわれわれだって、健康に注意すれば94まで生きられるのです。福島の人も、浴びてしまったのは不幸なことだったとはいえ、がっかりせずに健康管理をしっかりやって長生きしようではありませんか」と言われた。あれは説得力がありました。身をもって言われるとなるほどだと思います。本当にそうすれば長生きすることができるので、みんなで頑張りたいものだと思います。

5分も超過してしまいましたが、以上でお話を終わります。どうもありがとうございました。